『養育往来』における江戸の「子育て」について

On the Perspectives on Child Raising in the Edo Period Observable in *Yoiku Ohrai*

笠井　哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

(2011年8月29日受理)

People in the Edo period considered raising a child to become a full-fledged adult in the society as the most important matter in life only next to running their family business. This often gave rise to the importance of mental attitudes and discipline of the parents themselves. We can see in the book called *Yoiku Ohrai* the perspectives on education generally held by the people in the Edo period. In this article, I will closely examine such perspectives on child raising discussed in *Yoiku Ohrai,* and discuss them with special references to parents' mental attitudes, moral education, and human relationships.

Key words: *Yoiku Ohrai*, child raising, mental attitudes, moral education, human relationships

1. はじめに

江戸時代の「子育て」においては、地域の大人たちが頻繁に関わる「子育て」のネットワークも重要であったが、基本は家庭教育で、特に父親が子育ての全責任を負っていた。子どもを一人前にすることは、家業に次ぐ重要事項であり、その前提として親の心構えやあり方が常に問題にされた。

元禄期以後、大量出版時代を迎え、出版物の読者は、庶民の富裕層へ拡大していった。こうした商業出版の興隆は、子育て論の発展を促す可能性を秘めていた。なぜなら、読書とは本来「道を学ぶ」ことであり、出版そのものが教育的な営為であったからである。

およそ、人道を説いた書物には、子育て論が含まれていた。江戸時代には、純然たる育児書に限らず、あらゆる著作で子育て論が披瀝され、その潮流は為政者の嗣子教育、武士師弟の教育から、庶民を含む普遍的な教育論へと展開されたのである。

貝原益軒は『文訓』で、

民用にかなう書こそが益書である[1]。

という。如何に文章が麗しく、高邁な思想が綴られていても、民用とならなければ、無用の書と見なされたのである。その点で、江戸時代の子育て書の多くは、平易な仮名書きで、少なくとも「民用」を目指したものであった。

そしてこの流れは、やがて庶民のための通俗教訓書や寺子屋の読み書き教科書であった往来物にも、波及していった。特に往来物は、江戸時代の生活・文化の諸相を反映した「時代の鏡」として多種多様を極め、その中に、子育ての秘訣や親の心得が見られる。

その最たるものが、小川保麿（玉水亭）によって、天保10年（1839）に著わされ、天保15年に刊行された『養育往来』である。序文に、

子育てに有益な古来の教えや金言を集めた[2]。

とあるように、本書の子育て論に際立った独自性はない。しかし、江戸時代の子育て論を集約した内容になっているので、本書を読めば、江戸時代の平均的な教育観が一望できる。

では、『養育往来』の特色は、如何なる点にあったのであろうか。その宣伝文は、次のようであった[3]。

①本書が子育ての要点や金言を一通り集めたものであること。

②子どもの賢愚や人間性の特質が教育の有無で決まること。

③庶民児女の教訓目的で編まれた本書が、子を持つ家庭の必携書として推奨されていること。

以上のセールスポイントが挙げられ、「親子にとって有益な書」と宣伝されている。したがって、『養育往来』は、読み書きの教科書であると同時に、親子で読む育児書のような性格を持っていたといえよう。

本稿の目的は、『養育往来』における「子育て」に

ついて考察することである。特に、親の心得、道徳教育、人間関係について論じて行きたい。

2. 親の心得

以下で、江戸時代における他の「子育ての書」とも対比しつつ、『養育往来』の「子育て」について検討してみよう。

子育てについて、まず必要な「親の心得」とは如何なるものであろうか。先取りしていえば、『養育往来』も含め、江戸時代の子育て書は、「子育ての失敗が親の責任である」という見解をとっている。

まず、江戸時代の子育て論は、体罰や勘当について、如何なる見解をとっていたのであろうか。『養育往来』においては、

> 幼少から体に染み込んだ気随は、どうして容易に直すことができようか。たとえば、最初に墨で染めたものを、後で急に白くしようと望むようなものである。親が子を育てなかったことを棚に上げて、子どもを折檻・打擲したり、親子喧嘩のあげくに子どもが家出したり、勘当に及ぶなどは、実に嘆かわしく、悲しいことではないだろうか[4]。

と述べられている。

> 江戸時代の子育て書はほとんど例外なく体罰否定論です[5]。

という。また「子育て」は、しばしば樹木の成長にたとえられた。江戸後期の心学者であった小町玉川は、文政12年（1829）刊『自修編』で、次のように述べている。

> 樹木が生長し始めた頃は、性質が柔軟で思いのまま手を加えることができるが、やや長大になるともはや手の施しようがない。同様に、人も幼稚の時は人に従いやすく教育しやすいが、物心が付くにつれて年長者の善言や格言を用いなくなり、自分のなすことが善と思うようになり、一通りの教諭では間に合わなくなる[6]。

また、江戸中期の経世家で海防論の先駆者でもあった林子平は、天明6年（1786）の『父兄訓』で、

> 子弟を育てるには、甘やかし、そばやかして、玉のごとく育ててはならない。幼少より心持ちをしっかり教え、少しの事でも義理と恥を心がけるようにして、その上に、粗食を食べさせ、粗衣を着せ、大寒・大暑にも負けない心持ちを教えるべきである。心を柔弱に育ててはならない[7]。

と説き、「玉と育てて後に勘当」のような親の無慈悲を戒め、子どもの「不孝」や「不悌」は、決して子どもの罪ではなく、父親の罪であると言い切っている。

以上のような失敗に陥らないようにするためには、どうすればよいのだろうか。そのために、「まず親の姿勢を正すべきである」ということが説かれている。

『養育往来』には、

> そもそも子どもに教えたいと願うのなら、まず、親自身の身持ちを正しくし、奢りを慎み、万事倹約を心がけて、分相応を考え、つねに質素に育てよ[8]。
>
> 子ども教育には、親の身持ちを正しくすることが肝心である[9]。

と述べられている。このように、子育ての前提として「まず親自身が襟を正すべきである」という心得も、多くの論者が指摘する点で、例えば、江戸中期の朱子学者・室鳩巣は『不亡鈔』で、

> 親自身が正しくないのに、子を正しくしようとするのは大きな間違いである[10]。

と述べ、上杉鷹山は『鸚鳴館遺草』で、

> 子どもに善業をさせたいと思うなら、まずは親が善業をして見せることが当然の理である[11]。

と説いている。

特に注意すべき点は、最初は「親の真似」にすぎないことでも、それがやがて子どもの人格そのものになることである。江戸中期の有職故実家であった伊勢貞丈は『安斎随筆』において、

> 二、三歳より常に真似をして、いつともなくそのことに慣れ染まると、後はもはや真似ではなく、自らそれを行うようになる[12]。

と述べ、さらに、

> 幼児は言葉で教えても理解できないため、親が模範を示して同じ行為をさせるのが近道である。父の行いが正しい家庭では子もそれを真似し、父が不行儀の家庭では子も不行儀の真似をする。言葉で不行儀を戒めても子は理解できず、さらに、子を大いに罵りたたけば、かえって親を恨む心を引き出す[13]。

と喝破している。

日々蓄積された習慣を改めることは、大人であっても、いや大人であるほど難しいであろう。また、ここで「父親」が「子育て」の主体として説かれている点は注意すべきである。

親が子どもに向かい合うとき、注意すべきことは何であろうか。それは、「愛情をはき違えるな」という

ことであろう。

『養育往来』に、次のように記されている。

一切の所作・挙動・衣食・言語にいたるまで、一言の良い言葉も聞かず、わずかの良い事も見ず、気随・気儘を良しとして正しい行いを教えないために、その風俗が習慣となり、さらに一生を誤る結果となる。ああ、どうしてこうすることが子どもへの愛情ということができようか。これらは皆、ことごとくわが子を駄目にするばかりで、これを「曲愛」というのである[14]。

父母が子を養うだけで教えないのは、子を愛していないからである。教えても厳しくしないのは、これも子どもを愛していないからである。父母が教えても子が学ぼうとしないのは、自らを愛していないからである。子が学んでも実行しないのも、やはり自らを愛していないからである[15]。

『養育往来』は、教育するといっても親が厳しくしないと子どもはなかなか実行できないため、愛情を持って厳しくするという観点を強調している。さらに、子どもが親の教訓を学んで実行することは、自分自身を大切にすることだと教えている。

3. 道徳教育

子育て論の具体的な内容は、「道徳教育」である。江戸時代の子育て書では、「早く善悪を教え、悪を厳しく戒めるべきである」ということが、説かれている。『養育往来』に、

もともと子どもは、善悪ともに染まりやすく、育て方によってどのようにでもなる[16]。

子どもは物事に心が移りやすく、白糸が染まりやすいように、見たことをそのまま真似してしまうものである。だから、子どもの良い行いはずいぶんと誉めてやり、悪いことは堅く戒めなくてはならない[17]。

幼児より善い道を厳しく教え諭すべきであり、悪いことは堅く禁じなくてはならない[18]。

まず、四、五歳から添木をして、みだりに茂らせないようにし、勝手気儘な悪い枝葉が蔓延らないように、不行跡や我が儘をさせずに、「それはそうしてはならない。これはこのようにしなくてはならない」と一々申し聞かすがよい[19]。

横着・無道の悪行を少しも許してはならない。何事によらず悪い行いがあった場合には、厳重に戒め、二度と繰り返させてはならない[20]。

と説かれている。

『養育往来』は、「子どもが持って生まれた素質や家柄よりも、生まれてからの教育が大切である」ということを、何度も説いている。なるべく早い段階から親が正しい道を子どもに教えることを勧めており、幼児期の教育が一生を左右するという「先入主」観に基づく教育論を展開している。

こういう考え方は、貝原益軒の『和俗童子訓』でも強調されている。益軒は、

良いことも、悪いことも、善悪の分別がない幼い頃からの習慣によって影響されるように、まず最初に触れたことが先入観となり、それが本人の性質となってからは、後で良いことや悪いことを聞いても、その影響を受けにくくなるので、幼児より早く良い人に近づけ、良い道を教えることこそが重要である[21]。

と述べている。

さらに、「子育て」に必要なものとして、子どもに「苦労をさせ、わがままを許すべきではない」ということが説かれている。『養育往来』に、

本当に子どもを愛するなら、子どもに身勝手や気儘をさせず、ずいぶんと辛労をさせ、厳しく教え育てるべきである。これこそが、子どもを愛する親心である[22]。

元来、子どもは素直なもので、どれほど窮屈にしても、最初からの習慣次第で、他人が思う程の苦労はないものである。いわゆる「習うよりは慣れよ」とはこのことである[23]。

と説かれている。

江戸後期の農学者であった大蔵永常は、『民家育草』で『養育往来』と同様に、子どもを木の成長にたとえ、

生まれたての二葉のころから入念に育て、二、三歳の枝葉が多くなるころから添え木をし、悪い枝は取り除いて手入れをすれば、まっすぐな木になる。同様に、特に四、五歳からは我が儘の悪い枝が出てこないようにしっかりと行儀や躾を教えれば、将来は良い人間になる[24]。

と説き、素直な幼少時であれば、どれほど窮屈に育てても、最初から躾けられた通りなので、周囲が心配するほど、子どもにとって辛いものではないという。

社会全体に儒教、特に朱子学が行き渡っていた江戸では、「子育て」の際、「礼儀作法を、しっかり教えるべきである」ということが説かれたのである。

『養育往来』に、

八歳からは行儀を教えるべきである。門戸の出入り、食事のときや寝るとき、また、来客時や歩行中の礼儀など、それぞれの場面で挨拶ができるようにし、何事も年長者に後れるようにし、祖父・祖母・父・母・兄・姉などの家族の者を尊び敬う道を教えるべきである。また、嘘偽りを言ったり、善悪を隠したり、食べ物に口賤しくすることを堅く戒めるべきである。以上が子どもにとっての第一の教えである[25]。

と述べられている。

『養育往来』では、礼儀作法の教育を８歳から始めるとしており、その具体的な内容を紹介している。これは、『小学』に基づく教えである。他の教育論でも、８歳を開始年齢とするのが一般的である。

貝原益軒の『和俗童子訓』では、具体的な礼法は８歳から教えるとするものの、「尊長への礼、尊卑・長幼の別や言葉遣い」[26]など、礼の基本を６歳から仕込むべきとしている。

さらに、学問は何のためにするのかという問題についても触れ、「学問の目的を見誤るべきではない」と戒めている。『養育往来』に、

たまたま学問に進んでも、人の人たる道を教えず、単に学問を名利のために行うときは、どうして道理を弁え知ることができようか。身の行いにおいて、何の益があるのであろうか[27]。

道に背いて金銀・財宝を積み貯え子孫に残すよりは、むしろ聖賢の教えを学ばせ、自己を修め、人を治める道を教えるべきである[28]。

と説かれている。

漢学者の中村弘毅は『父子訓』で、

書物を読んだか否かではなく、その人の行為が人道にかなっているか否かが学問した人の基準である[29]。

とし、学問は士農工商が、

各々その家をおさめ、身を保ち、業を守るために稽古[30]

するもので、万民に不可欠なものとして庶民の学問無用論を払拭する。また一方、「学問をすると病気になり、気詰まりする」との俗説に対して、

学問と養生は同じ道理で、かえって学問は養生にも益が多く、一切害はない。学問することで気詰まりや鬱屈が生じ、病気になると思うのは、自ら学問をしたことがない者の惑いである[31]。

と反駁している。

ここでいう「学問」は、広く学芸一般を学ぶことではなく、主として儒学、すなわち聖賢の道を学ぶことを意味している。だから、儒教経典を読んでその本質を体得する、要するに自己を修め、人を治める道を単なる知識レベルではなく、行動に及ぶまで修練して身につけることを目指すものであった。『養育往来』もその意味で「名利目的の学問」を否定し、いわば「人間学」としての学問を説いた。こういう学問には、初めはあっても終わりはない。それは生涯続く学問であり、今日的な学問とはややニュアンスが異なる。むしろ、現代の「生涯学習」に近いものであった。

4. 人間関係

人間は、一人で生きているのではないから、周囲の影響を受けやすい。如何に親が考えて教育しようとしても、家庭の外で悪い影響を受けてしまえば、うまく行かなくなってしまう。そこで、「友人や遊びを吟味すべきである」と説くのである。『養育往来』に、

選ぶべきは子どもの日頃の友人であり、普段の遊戯である。仮にも遊女や博打の場所へ行かせてはならない。また、軽薄・浮気の者を友にさせてはならない。決して無益の遊芸を教えず、無用の玩び物を与えてはならない[32]。

子ども遊戯だからといって、その善し悪しを吟味しないのも、子どもを教え育てる道ではない[33]。

といわれている。

さて、江戸時代に、いち早く子どもの遊戯を論じたのは、江戸中期の医者・香月牛山の正徳４年（1714）刊『小児必用養育草』で、次のように説いている[34]。

毎年正月に男児に破魔弓で遊ばせ、弓を射ることを教えるが、これは平和な時代でも「武」を忘れないという意味であろう。子どもが破魔弓を持って走り回れば、体温が発散し、病気もなく、歩行も健やかになる。

凧揚げは、『続博物誌』に「子どもが空に向かって気を吐き、風に吹かれて放熱させるため」とあるが、近年はその意味も知らず、金銀を鏤めた五、六尺もの大凧を壮健な男にあげさせる。これは、単に目を喜ばせ、財を費やすばかりで無益である。小さな凧を子ども自身の手であげさせるのが、本来の姿である。

羽子板は『世諺問答』に「幼児が蚊に刺されないための呪い」とあるがそうではない。子どもは熱を帯びやすいので、この遊びを通して、風に当たり、空に向かって気をはき、熱を放つということであろう。

このほか「殿事」、「馬事」、「竹馬」、「飯事」

にも言及するが、いずれも遊びによる健康増進や徳育面の意義を説いている。

一方、益軒の『和俗童子訓』には、次の記述が見える[35]。子どもの凧あげ・破魔弓・独楽回し・手鞠・人形遊び・羽子板等は、幼児特有の一時的な戯れで、成長に従って廃れるから、心の面で問題がない限り、子どもの心に任せてよい。

費えが多い遊び、飾りが過ぎる遊び、博打に似た遊びをさせてはならない。子どもが遊びを好むのは常の情だから、有害でない限り、強いて押さえて心を屈折させてはならない。

さて、子どもの教育にあたり、「教師と親が心を一つにすべきである」ことも説かれる。『養育往来』に、

> 師匠が如才なくしっかり教えても、親が厳しくしないと、子どもは一生懸命に学ばず、怠りがちになって、年をとってから後悔する者が多い。だから、親と師匠の慈愛の気持ちを一つにして子どもを教育すれば、子どもの学問は必ず成就するものである[36]。
>
> 子を養って教えないのは父の過ちである。教えても厳しくしないのは師の怠りである。父が教えて、師が厳しいのに、学問が成就しないのは子どもの罪である。そうはいっても、教えて成就しない子どもは少ない[37]。

といわれている。

『養育往来』は、親も師匠も深い愛情の心でしっかりと厳しく子どもに教えなくてはならないと説いている。そして、「子を養って教えないのは父の過ち」と述べ、子育ての全責任が父親に帰することを明確に説いている。本文の他の箇所で、孟母や楠木正成の妻が賢母たる所以を示して、

> 女性ながらこのように立派に子を教えている。ましてや、子どもを注意深く観察するという点でも母が父に及ばないことがあろうか[38]。

と述べているのも、やはり父親の教育責任を第一義としていることを物語っている。

また、小町玉川は『自修編』で、父兄と師匠について示唆的な意見を述べている[39]。

第一は親が師匠を敬い、全てを師匠に任せること。子どもを学校に入れても、親が子どもの上達を願うばかりで師を敬う気持ちが少ないと無意味とし、いったん師匠につけたら師匠の言いつけを守らせ、日々、師匠を尊敬して怠ることがないようにさせよと説いている。

第二は、師匠たる者は、束修（入学金）の多寡で指導上の差別をしてはならないこと。近年は入学金によって弟子の入門を決め、弟子も入学金で師を決めるなど、教育が「市井の交易」のようになり、実に恥ずべきことだと批判している。そして、師匠は一心に教育することだけを考え、束修の多少にこだわるべきではない。師匠が生活困難になったら、父兄たちが財力の限り、救う道もあろうとも述べている。極端な場合、他の師匠に門弟を取られることを恐れる師匠もいたようで、「これでは師動は行われない」と嘆いている。

第三は前項と関連し、師匠に渡す金品の多寡を決して子どもに話してはならないこと。これを話すことで、子どもは「道を軽んじ、師を蔑する心」が生ずるために、子どもは算術を学ばせても、家の金銭の出入りや家計のことは知らせるべきではないと注意している。これらの損得は成長するにしたがって自然に憶えることだと指摘している。

第四に、師に託すのは、家庭内では父子の道が行われにくいからである。同じ室内に親子が同居するれば、父の行状が全て道の通りというわけにはいかず、その場合には父の非を見て咎める気持ちが子どもに起こるため、良師や良友に子を託すのが望ましいと考えたのである。

特に、男女間の「淫奔・猥雑のはなはなだしき」事柄、つまり性教育などは親子では面と向かって話しがたいため、「子を易えて教えるのは妙術」とも述べている。

5. 子育ての試行錯誤—おわりにかえて—

以上のように、親の心得から道徳教育、人間関係についてまで説き及んだが、「子育て」は思うように行くとは限らない。まして、第一子の場合は、親は初めての経験であり、子育ては試行錯誤の連続となってしまうのが普通である。『養育往来』に、

> 子を育て教えるには、親の身持ちを正しくすることが第一である。似我蜂が他の虫を取ってきて、「我に似よ、我に似よ」といってこれを育てると、必ず、親さながらの蜂になる。心ない虫ですら、このようである。ましてや人の子はなおさらそうであろう。親が正しければ、子どもも自ずと親の正しい所に似やすいものである[40]。
>
> 誠意をもって考えれば、目的にぴたりと合っていなくとも、大きな見当違いにはならない。あらかじめ、子どもを養育することを学んでから結婚す

る女性はいないが、親子の心というものは自然と通い合うものである[41]。

と述べられている。これは、『大学』の「伝第九章」の言葉である。実は『大学』ではこの前段で、

その家を斉うとは、その家教うべからずして、能く人に教うる者はこれ無し。…慈は衆を使う所以なり[42]。

と述べている。我が身を修めることが家を斉えることであり、家々が斉えば、国が治まり、世の中が安泰となることから、治国・平天下を実現するためには、斉家が必要であり、斉家を実現するには、自己の修養ができなくてはならない。究極においては人を治めることも身を修めることも同じであり、個人の人格完成と国家の平和は表裏の関係にあることが示されている。そして、指導者が人々を治めることができるのは、慈愛の心があればこそであると説いた上で、先の「誠意をもって考えれば」に続けている。

したがって『大学』の趣旨からすれば、この一節は母親が誠の愛情で、物言わぬ赤子の心を読み取って、支障なく養育するように、至誠と慈悲の心で人民に向き合えば、大きな過ちを犯すことはないということを教えたものと解すべきであろう。

しかし、『養育往来』の中で、作者があえてこの語を引いた理由は、本当の子育ては体験して初めて実感できるものだが、真心で子どもに向き合えば、それほど的外れにはならない、ということを伝えようとしたからであろう。つまり、知識のみで子育てはわからないが、親子には理屈を越えた情愛があり、真心であたる限り決して不安になることもない、というメッセージであったといえる。

文　献

1）貝原益軒：益軒十訓（下巻），塚本哲三校訂，p. 83（友朋堂書店，1913）

2）以下、江戸時代の子育て書からは、下記の文献を現代語訳したものを引用する。煩瑣になるので、巻数・頁数と表記する。3・96

山住正己・中江和江編：子育ての書1（平凡社、1976）

山住正己・中江和江編：子育ての書2（平凡社，1976）

山住正己・中江和江編：子育ての書3（平凡社，1976）

3）小泉吉永：「江戸の子育て」読本，p. 177（小学館、2007）

4）3・103

5）小泉吉水：江戸の子育て十カ条，p. 10（柏書房，2007）

6）2・165

7）2・67-68

8）3・101

9）3・104

10）2・131

11）2・104

12）2・142

13）2・142-143

14）3・103

15）3・100

16）3・97

17）3・98

18）3・96

19）3・100

20）3・101

21）2．5

22）3・103

23）3・101

24）3・26

25）3・100

26）2・35

27）3・103

28）3・106

29）3・12

30）3・11

31）3・16

32）3・102

33）3・98-99

34）1・355-357

35）2・14

36）3・100

37）3・101

38）3・100

39）2・166-168

40）3・104

41）同前

42）大学，宇野哲人全訳注，p. 64（講談社，1983）